

間の断絶は、すでに十八世紀古方派の中に芽ばえていた、気というもののへの認識にかかわるある本質的な態度・スタンスの差異にあるとも言えよう。

永富独嘯庵の『漫遊雜記』の中には永富自身の自験例が記され、自ら微毒を病んだことも記されている。「気疾」という用語も、そうした性感染症へのアプローチの中からつむぎ出された概念であると考えられる。

「気疾」という用語は、再刻本では11回用いられ、前半6回は総論、後の5回は症例中に記されている。「今世患_二微毒_一者、多兼_二氣疾_一、故処方亦不_レ兼_二療氣之藥_一、則毒氣凝而難_レ散。」痿躄初発、其人無_二微毒暨瘀血之諸症_一而其心下痞鞭弦急者、多是_二氣疾也、須_下用_二吐方_上後長_中服瀉心之方_上。」蓋人多_二思慮_一火易動、火動則津液涸、加_レ旃恣_レ欲則因為_二虚勞_一、虚勞亦多_二氣疾_一。」これらは総論の前半3回の引用である。気疾という用語が、微毒、瘀血、虚勞、痿躄などの用語と並び置かれ、兼ねるといふ言い方で鑑別しつつ複合病態を診て治療に当たっていることが示されている。

「一男子患_二氣疾_一、左右脈洪數、心下痞堅、大便秘結、寤寐不安、語言失_レ理、称_レ王称_レ帝、余以_三聖散_一、吐_レ之_二二回_一、与_三參連白虎湯_一三十余日而全愈。」初版、再刻本ともに筆頭にある症例であり、気疾の三徴候が身体所見と精神所見それぞれ簡明に記されている。「有_二一婦人_一、日言、我面今日、加_レ長數寸、我面今日加_レ短數寸、蓋得_三之_一其性多_レ妬、其夫多情、常懷_二鬱悶也、長_二服_三黃湯_一而愈、諸氣疾、作_二恠状_一者、大

概皆如_レ此。」この症例の註解の中で富士川游は、「気疾と称するものは専ら情志の滯うるに因りて現わるところの諸症にして、内の方、……の七情に傷られて……今で言えば主に……神経症を概称し、時には癩癩の一症をも気疾の中に入れ、或は精神病の部類に属して、しかも外から見て癩狂と称すべきほどの症をも気疾の中に算せしものかと思われる。」と把握して述べている。

文献

- (1) 永富独嘯庵『漫遊雜記』好古堂、明和元年
- (2) 『漫遊雜記叢語』積玉圃、文化六年再刻、『近世漢方医学書集成14』名著出版、一九七九年
- (3) 富士川游『譯解漫遊雜記』中山文化研究所、昭和十五年
- (4) 富士川英郎編『富士川游著作集第六卷』思文閣出版、一九八一年
- (5) 土居健郎『甘えの構造』弘文堂、一九七一年

(平成七年三月例会)

箕作阮甫『産科簡明』と原著者及び原著について

石原 力

幕末の代表的蘭学者として箕作阮甫(一七九九—一八六三)はあまりにも有名であるが、その数ある訳書の中で『産科簡明』は刊行されず、写本もまれて『幻の書』(玉木存)といわ

れるように知られていない。「恨ラクハ世ニ其存否ヲ詳ニセサルコトヲ」(佐伯理一郎『日本女科史』)、「此書の全備したものを余は見ぬ」(呉秀三『箕作阮甫』)、「之を見、若くは之を閲読する事容易にあらず」(緒方正清『日本産科学史』)、「原本が不明」(呉正彦『箕作阮甫の研究』)などといわれてきた。

『簡明』の所在について『国書総目録』は乾々齋文庫、即ち杏雨書屋所蔵本しか挙げていない。『簡明』の構成はa巻之一解剖学、b巻之二知生学(人身究理学)、c巻之三上下知生学、d目録、e図解及び図、f巻之四衛生保平説より成るが、現在①東大医学図書館史料室所蔵の旧菊池文庫↓「秀三」文庫に阮甫自筆本d e fがある。緒方正清が箕作秋坪の次男菊池大麓男爵から借り受け閲読したのはこれで、彼はa b cはみていないのである。なお②呉文庫には北島「謙」写本(図は田原筆写本) a b c d eもある。③杏雨書屋の旧藤浪剛一所有本は、私の比較によれば、字体が①と一致するものが多く、阮甫の自筆本で、①が稿本、③は浄書本と考えられる。③では第十六図に書き込み説明がある等①と違う所が僅かにある。斎藤方策が養子永策に書簡で④小石元瑞所有本の借用を依頼しているが、これは現在小石家に所蔵されている(小石秀夫氏)。また⑤光後玉江(女医)旧蔵本aが岡山県久米郡中央町興禅寺にある(芝原秀諦住職)。その他『医学古書目録』に京都の三宅宗雄氏所蔵本があるが、問合せに返答がなかった。『簡明』の校者田原玄周綱(二八一五—一六九)は三田尻の人、天保末から弘化の頃江戸での阮甫門人で、萩で開業、しばし

ば長崎へ往来した。

『簡明』の翻訳完了は凡例に天保一五(二八四四)年秋季中浣(九月中旬)と記されている。

『簡明』の自序、序、凡例等によれば、原著者は「仏蘭西蒙多百而里尔、医学之布羅歌所兒、晏妥儒傑氏」、蘭語翻訳者は「其名ヲ載セス」、発行所は「勃律斯兒府第八街第三百三十家ブレスト、ハン、ケムペン書賣」、発行年は「紀元千八百二十年」となっている。

原著者アントワヌ・デュジエス Antoine Duges (Antoine-Léon Dalescaut D. また Antoine Louis D. としたものもある)

は、一七九七年一月一日 Mézière 病院外科医 Pierre-Augustin 及 Antoinette Fourné の息子として、アルデンヌ県メジエール市で生まれた。家系は産科に関係深く、曾祖母は助産婦、祖母も Hôtel Dieu に勤めた助産婦、叔母には Baudeloque の愛弟子の著名助産婦で医学面にも業績のあった Marie-Louise Lachapelle (旧姓 Duges) がいる。医学を修めにパリへ出、一八一七年インターンの時、小児の病に悲しみを覚えた。一九年パリ大学医学部解剖助手、二二—二五年ラシャペルの名著『分娩の経験』三巻をパリで出版した。二一年学位論文「新生児疾患に関する研究」口頭試問に合格(パリ大学)。二三年「発熱、炎症及び主要神経病の種類に関する生理・病理学的試論」出版、受賞。二四年産褥神経炎を五型に分類して詳述。大学教授資格論文口頭試問に合格(パリ大学)。二四或は二五年モンペリエ大学医学部産科学教授、外

科病理学教授兼外科学教授。二六年『産科学マニュアル』出版。二七年同書の蘭訳『産科学ハンドブック』が出た。三二年『動物の進化過程における器官の一致についての報告』出版。三三年ラシャペルの愛弟子助産婦の Boivin 医学博士と共著で、名著『子宮及びその付属器疾患の経験論考』出版。原発腫瘍、女性尿道癌の最初の記録、胎状奇胎の分類、慢性（悪性）潰瘍形成の子宮頸切斷術、恥骨上索（円靭帯）靜脈瘤等の新知見、腔鏡等も含まれ、ボワヴァンの彩色した美しい図譜は一九世紀末まで利用された。三五年『各期における両生類の骨学的・筋学的研究』出版、フランス学士院から受賞。三六年モンペリエ大学医学部長。三八年『ヒトと動物の比較生理学論考』出版。三八—三九年『比較生理学概論』出版。三八年五月一日モンペリエで逝去（四〇歳）。

『簡明』の祖本は『産科学マニュアル、別名、助産学及び助産術提要。付、婦人と新生児の主要疾患の説明、及び瀉血と種痘の概要を含む』（Manuel d'obstétrique, ou précis de la science et de l'art des accouchemens : suivi de l'exposition des principales maladies des femmes et des enfans nouveau-nés, et contenant un précis sur la aignée et sur la vaccination）である。図四五、折疊図版三葉、頁数六十四五〇—四九、初版パリ一八二六年、二版パリ三〇年、三版モンペリエ及びパリ四〇年、十二折判。

原本、即ち蘭訳本は、宮下三郎氏の指摘（一九七五）通り、書名『産科学ハンドブック。フランス語からの翻訳』（Hand-

boek der verloskunde uit het Fransch vertaald）八折判、頁数七十四五八、発行所 Brest van Kempen, Boekverkooper, Gersmarkt No 331, Wijk 8 発行年一八二七年である。

この原本は菊池大麓から東大史料編纂所へ寄贈された蘭書の目録（金井圓氏）にはない。また日本所在の蘭書目録を各種精査したが、ないようである。私は馬堪^{マカニ}温^{ユヅ}氏の御好意で Wellcome Library 所蔵の原本の一部コピーを入手した。タイトル・ページには一八二七年とあり、『簡明』序、凡例の二八年は誤りであろう。原本目次からみて、翻訳は第一部解剖、第二部生理、第三部衛生に限られ、全体頁数の三分の一相当で、第四部婦人の病理、第五部新生児の病理と、付録の瀉血と種痘に対する内科・外科的追加は省かれ、末尾の図の説明（及び図）が訳されている。第四部には子宮外妊娠、産科鉗子術、恥骨結合切開術、帝王切開術等の記載があるが、訳されていない。

『簡明』の訳文は流麗、正確で、足立長雋がボードロックの『産科原理』を訳した『産科礎』と共に、ヨーロッパをリードしたフランス産科を、未完成ではあったが、本格的に紹介したことに本書の意義がある。

（平成七年三月例会）